未来へつなぐ牛たちへの想い

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科　3年　松本 七海

搾乳牛30頭、育成牛10頭ほどの小規模な牧場で、いつもたくさんのこどもたち、地域の方の笑い声が溢れている。そんな牧場を営みたい！この目標は、たくさんの方との出会い、そして人とのつながりから生まれました。

私の家は非農家で、酪農に興味をもったのは小学生の時に観た酪農家さんの1日に密着したテレビ番組がきっかけです。その番組での、白と黒の人の何倍も大きな体をもつ牛と、牛を大切そうに扱っている酪農家さんの、深い信頼関係に魅力を感じました。それ以来、酪農への憧れは消えることなく、酪農に関する様々な知識を深めたいと思い、神奈川県立相原高等学校畜産科学科に入学しました。相原高校では畜産部に所属し、365日欠かさず牛の飼養管理を行い、自分たちで搾乳した牛乳を自分たちの手で地域の方々に販売しています。実際に牛の飼養管理を行うことで、休みのない酪農業の大変さも知りましたが、牛たちの優しい瞳に癒されながらそれ以上のやりがいを感じ、酪農家になりたい！という酪農への憧れは、気づけば具体的な夢となり、日に日に大きくなっていきました。

畜産部に入部した1年目の冬、相原高校の卒業生であり神奈川県相模原市で酪農を営んでいる藤曲和美さんとの出会いが私の目指す酪農の夢の始まりとなりました。藤曲さんから、奥さんが怪我をしてしまい1人での牛舎作業は大変だからよかったら手伝ってほしいとの声がかかり、冬から本格的に藤曲牧場で実習を開始しました。藤曲牧場へは授業が終わった放課後、週に3回ほど行き、学校では学べない実践的な酪農の知識や技術を習得することができています。実習を重ねるうちに「松本は信頼できる。よくやってくれるから助かる。」と言っていただき、搾乳牛にとってとても重要な配合飼料の設計も特別に任せてもらうことができました。それだけでなく、今年に入ってからは「うちの牧場を様々な研究に活用してみろ」と言っていただき、現在では交雑牛の低コスト哺育実験にも取り組ませていただいています。この実験は、学校の農場で発生したアルコール不安定乳や乳房炎牛の牛乳などの廃棄乳を哺育に利用するというものです。学校の交雑牛は廃棄乳をベースとした哺育をし、藤曲牧場の交雑牛には粉乳をベースとした哺育を行い、飼料コストや増体、セリ価格を比較し、交雑牛の低コスト哺育、また高値での取り引きが可能かを研究しています。藤曲牧場に通いはじめて、酪農への思いは増す一方です。

しかし、酪農の厳しい現場に立ち会うこともありました。実習に行き始めたばかりで、1頭1頭異なる複雑なエサやりに手間取っている私をじっと静かに、やさしく見守ってくれる年老いた牛「おばあちゃん」が私は大好きでした。しかし、実習を始めてから数カ月が経ち、実習にも慣れた頃「おばあちゃん」は蹄の病気にかかり起立不能になってしまいました。

そんな状況に「残念だけど、淘汰するしかない」と藤曲さん。私は、「淘汰」という言葉を信じられず、「おばあちゃん」を何とか立たせようといろいろな方法を試しましたが、「おばあちゃん」は３日後に淘汰されました。経済動物としての牛の命について頭では分かったつもりではいましたが、私はとても悲しくなり、やるせない思いでいっぱいで、一度は酪農を諦めようかとも思いました。しかし、「おばあちゃん」が居なくなっても、牧場にはたくさんの牛たちがいます。悲しみをごまかしながら実習に通い続けました。

そんなとき、「ふく」そう名付けられた子牛は、おぼつかない足取りで私に近づき、「おばあちゃん」に似た可愛らしい瞳で一生懸命見つめてきました。そのとき私は、酪農の本質にようやく気がつきました。命の誕生から牛乳生産がはじまり、精一杯働いてくれた母牛はお肉となり私たちの命をつないでいってくれます。そんな命のつながりを感じられるのは酪農しかない。そう思い、私は自分の思い描く酪農の夢がより一層強くなっていきました。

私の描く酪農の夢は、藤曲さんのような都市近郊の牧場の後継者となり、「酪農家さんの思いや願いをのせた牧場経営」をすることです。藤曲さんは現在７０歳。後継者はおらず、牛たちを守っていきたいが、いつまで牧場を続けていけるのか悩んでいる様子でした。このような状況は藤曲牧場に限った話ではありません。そこで私は、このような牧場の後継者となり、酪農家さんの思いが詰まった牧場を守りたい！そんな思いから夢に向かって歩み始めました。

夢への第一歩として、より実践的な飼育技術を身につけたいと、多くの酪農家さんが取り組んでいる共進会への参加に挑戦しました。共進会は乳牛の改良の成果を外貌から審査する大会のことで、大会本番で牛を綺麗に魅せるリード技術も大切です。毎日いろいろな牛でリード練習をし、時には藤曲牧場での実習を終えた夜、学校に戻って練習することもありました。しかし、自分より何倍も大きな体をした牛を引くことは簡単ではありません。引っ張っても歩いてくれないことや、暴れた牛に引きずられることもあり、牛が怖いと思った瞬間もありました。それでも練習を続けていくうちに牛が私と一体となって歩いてくれることが増え、上手く引けずに悩んだ日々を吹き飛ばすほど嬉しくなりました。学校の牛の中でも一番息を合わせて歩くことができた牛「ショウチュウ」とショーリンクを歩くことを夢見て日々の飼養管理、共進会に向けての活動を毎日欠かさず行い、今年の春に行われた神奈川県共進会に出場しました。その結果、「ショウチュウ」は全体の2位、相原高校として初めてのリザーブジュニアチャンピオンを、私はベストリードガール賞をいただきました。このように、今まで努力してきたことを結果として残すことができたことはとてもうれしく、一生の思い出です。共進会を通して多くの酪農家さんとも交流することができ、夢を実現させたい！そんな思いをより一層強く感じました。

３年生になってからは酪農への理解を深めてもらうためのイベントの開催もしています。

牛とのふれあいやエサやり体験、乳しぼり体験などを実施し、毎回多くの方で賑わっています。参加していただいた方から「酪農を身近に感じた」などの反響があり、多くの方に牛の魅力を知っていただくことができました。ふれあいイベントを通し、地域の方に酪農への理解や関心を深めてもらうことは、私の夢である都市近郊の牧場を守る上で大切なことだと考えます。

藤曲さんとの出会いから始まり、このような取り組みを通して、私の酪農の夢はさらに大きく、具体的になっています。酪農の魅力を伝える酪農教育ファーム、おいしい！と評判のアイスクリームに、こどもたちの笑い声が絶えない牛舎。都市近郊の牧場だからこそ果たすことのできる役割を見つけていきたいと思います。

現在、廃業する牧場が増え、臭気の問題など都市近郊でその傾向は顕著に表れています。また、最近は生乳不足が騒がれていますが、それだけでなく、酪農家さんが地域の中で担ってきた様々なつながりが絶たれてしまうのではないかと、私は酪農家さんとのつながりの中で感じています。食料生産という点だけでなく、牛と人が繋ぐ輪、地域から愛される牧場経営を目指し、卒業後は大学校でより専門的な酪農の知識や技術を身に付けたいと考えています。酪農家さんの思いをつなぐことのできる牧場経営者を目指して。